

幼児音楽特別研究における教育実践[I]

—歌唱・ピアノ伴奏の実技発表を通して学生たちが得た気づき—

朝野典子

ASANO Noriko

本稿は、夙川学院短期大学専攻科保育専攻において筆者が担当する科目「幼児音楽特別研究」の教育実践に関する研究である。当科目では教育および福祉の現場において「療育的な音楽活動」を実践するための技能の習得をめざしている。

この授業において前期と後期それぞれの終了時期に、学生たちが習得した歌唱とピアノ伴奏の実技力を発表する場面を設定した。発表後にはレポートを課し、「(1)歌唱実技発表を終えた感想・気づいたこと」、「(2)ピアノ伴奏実技発表を終えた感想・気づいたこと」、「(3)他者の実技発表に立ち会った感想・気づいたこと」の3項目について記述を求めた。本稿では2011年度および2012年度の履修生、合計43名より提出されたレポートの内容を分析している。

分析の結果、実技発表を通して学生たちが得た気づきは、「緊張による影響に係る気づき」「緊張の原因に係る気づき」「コミュニケーションに係る気づき」「音楽表現に係る気づき」「その他の気づき」の5項目に分類された。実技発表を通して学生たちが得たこれらの気づきは、保育専門職に必要な音楽表現技能やコミュニケーション能力を向上させるうえで有効に働くと考えられる。

キーワード：実技、発表、歌唱、ピアノ伴奏、気づき

つの技能を統合しながら障害児や障害者を対象とする

1. はじめに

保育専門職をめざす学生にとって人前で話し、歌唱し、ピアノ演奏や伴奏をおこなうといった力は、必ず獲得しなければならない技能である。専攻科保育専攻の選択科目である幼児音楽特別研究では、これらの音楽表現に係る技能を習得するための実技をおこなう。

この科目では、幼児教育および保育の現場のみならず、障害児療育施設や障害者福祉施設等においても幅広く対応できるような音楽表現力と指導力の習得をめざしている。具体的には、音楽性豊かな歌唱表現をおこなう技能、ピアノ演奏および伴奏をおこなう技能、コミュニケーション技能の3点があげられる。これら3

「療育的な音楽活動」においても指導力を発揮できるようになることが求められる。

授業のなかでは、前期と後期それぞれの終了時期に学生たちが習得した実技力を発表するための時間を設けている。実技発表は、2～3人を1グループとして互いに歌唱と伴奏の役割を交代する形態をとり、発表後にはレポートの提出を求める。

実技発表をおこなう経験は、保育専門職に求められる「演じる技能」と「精神的な強さ」を獲得するために有効に働くと予測される。また、他者と協力しながら音楽づくりをおこなう経験は、学生たちが個々に歌唱やピアノの練習に励むだけでは得られない気づきを

もたらすものと期待する。

【補足】 幼児音楽特別研究を履修する学生の多くは、保育音楽療育士資格の取得をめざしている。保育音楽療育士は一般財団法人全国大学実務教育協会が認定する民間資格であり、障害児教育において発達的な視点を取り入れながら、保育と音楽療育に関して高度の知識と技能をそなえた障害児の専門職として、さらに生涯学習に関与できる人材の養成をめざすものである。

2. 方法

2.1 調査対象・期間

調査対象は2011年度の履修生23名および2012年度の履修生20名、合計43名である。

調査期間は実技発表を実施した2011年8月（前期）、2012年2月（後期）、2012年8月（前期）、2013年2月（後期）の4回である。

2.2 手続き

歌唱とピアノ伴奏実技発表の終了後、学生たちにレポートを課す。その記述から具体的な内容を抽出し、それらを分析して分類項目を設けて整理し、筆者の授業記録を参照しながら考察する。

3. 内容

3.1 実技発表の概要

前期、後期ともに実技発表の2ヶ月前（前期6月、後期12月）に、実技発表の概要と実施手順を学生に説明する。

【実技発表の実施手順】>

- ・実技発表は2～3人で1グループをつくり、グループの全員が相互に歌唱とピアノ伴奏を担当する。
- ・グループはくじ引き、または話し合いによって決める。
- ・発表する楽曲は、授業時に習得した楽曲を中心にグループで話し合って決める。
- ・使用する楽譜は個人の実技力に合わせて、各自で選定する。
- ・実技発表の順番はくじ引きによって決める。
- ・歌唱者は実技発表の前に、子どもや障害者を想定した「導入」のための声掛けをおこなう。
- ・発表時間は、導入を含めて3分間とする。

- ・発表に立ち会う他の学生は半円形に並べた椅子に着席し、発表者に対して受容的な態度で臨む。

[写真] 実技発表の一場面



歌唱者とピアノ伴奏者が実技発表をおこなう。他の学生たちは発表者を半円形に取り囲む。

3.2 レポート課題

実技発表終了後、次の3項目についてのレポートを課す。

- (1) 歌唱実技発表を終えた感想・気づいたこと
- (2) ピアノ伴奏実技発表を終えた感想・気づいたこと
- (3) 他者の実技発表に立ち会った感想・気づいたこと

4. 結果

レポートの記述内容を整理・分析した結果、学生たちが実技発表を通して得た気づきは、次の5項目に分類される。

- (1) 「緊張による影響」に係る気づき
- (2) 「緊張の原因」に係る気づき
- (3) 「パートナーとのコミュニケーション」に係る気づき
- (4) 「音楽表現」に係る気づき
- (5) その他の気づき

4.1 歌唱実技発表を終えた感想・気づいたこと

4.1.1 「緊張による影響」に係る気づき

レポートには「緊張した」「緊張して～だった」という記述が目立つ。学生たちが「緊張による影響」と感

じる内容は次のとおりである。

- ・声が震えた
- ・足が震えた
- ・思うように声が出なかった
- ・声が小さくなった
- ・高い声が出なかった
- ・音程がうまくとれなかった
- ・歌い出しの音をうまくとれなかった
- ・口を大きく開けられなかった
- ・表情がこわばった
- ・笑顔で歌えなかった
- ・歌詞を忘れて頭が真っ白になった
- ・楽譜にかじりついて周囲を見ることができなかった
- ・リズムに乗れなかった

4.1.2 「緊張の原因」に係る気づき

緊張の原因について言及した内容は次のとおりで、練習や準備の不足、打ち合わせの不足が原因で緊張したととらえている。

- ・もっと練習していればこれほど緊張しなかったと思う
- ・事前に発声練習をちゃんとしていれば、もう少しリラックスして歌えたと思う
- ・伴奏者と速度や歌い出しについて打ち合わせしていなかったため、本番では焦って緊張した

4.1.3 「パートナーとのコミュニケーション」に係る気づき

歌唱者の立場から、伴奏者とのコミュニケーションについて記述された内容は次のとおりである。

- ・友達が伴奏してくれたので力を合わせることでがんばろうと思えた
- ・パートナーが自分のために一生懸命練習してくれてうれしかった
- ・自分一人で弾き歌いするのと違って歌うことに集中できた。しかし、ここは強く歌いたいと思うところが伴奏者にうまく伝わらず、難しさも感じた
- ・ピアノに頼りすぎず、自分でしっかり歌おうという心がけが大切だと思う

- ・ピアノ伴奏者がまちがえても、気にせず歌うことが大切だと感じた

4.1.4 「音楽表現」に係る気づき

歌唱技術についての気づきに加え、表情や周囲への視線の配り方といったふるまいについても記述されている。

- ・聴いている人に伝わるように大きな声ではっきり歌うことが大事だと気づいた
- ・自分の声に合った声域の曲を選ぶことが大切だと思った
- ・精一杯の気持ちを込めて歌うことが大切だと思う
- ・聴く人に何を伝えたいのかを大切にすることも大事だと思う
- ・聴いている人の様子も見ながら歌うことの大切さを学んだ
- ・歌うときの表情はとても大切だ
- ・笑顔で歌うことで歌に興味を持ってもらえると思う

4.2 ピアノ伴奏実技発表を終えた感想・気づいたこと

4.2.1 「緊張による影響」に係る気づき

歌唱実技発表と同様に、「緊張した」「緊張して～だった」という記述が目立つ。緊張の影響によって生じたと感じる具体的な内容は次のとおりである。

- ・手足が震えた
- ・不安でいっぱいになった
- ・頭が真っ白になった
- ・弾きまちがいをした
- ・どこを弾いているのかわからなくなった
- ・速度が速くなった
- ・練習のときのようにうまく弾けなかった
- ・一人で練習しているときにはまちがわなかった箇所でも本場は焦ってまちがえた
- ・相手に迷惑がかからないようにたくさん練習したつもりでも、緊張してまちがえた
- ・みんなの顔を見て弾こうと思っていたが、余裕がなくて弾くことに必死だった

4.2.2 「緊張の原因」に係る気づき

緊張の原因についての記述は次のとおりである。歌唱発表と同様に練習や準備の不足、打ち合わせ不足を緊張の原因ととらえることに加え、伴奏者としてのプレッシャーから緊張したという記述もある。

- ・もっと練習していればこんなに緊張しなかったと思う
- ・あまり練習できていなかったから不安で緊張した
- ・伴奏合わせがあまりできていなかったので緊張した
- ・ピアノを弾いて歌をリードしていくのは、とても責任重大で緊張した

4.2.3 「パートナーとのコミュニケーション」に係る気づき

ピアノ伴奏者の立場での「パートナーとのコミュニケーション」についての記述は、歌唱者としての立場よりも記述分量が多い。

- ・人のためにピアノを弾くことはすごくいいと思った。自分のことでない分、より頑張らなくちゃという気持ちになれた
- ・パートナーとおこなう発表なので友達のためにも練習できて、この発表のやり方は自分のためになったと思う
- ・協力して支え合い、共にがんばれたので楽しかった
- ・励まし合ったりして、コミュニケーションをとれたので、すごく良い経験ができた
- ・相手が歌えるように、相手のために練習をがんばった
- ・初めて人が歌っている時の伴奏をした。とても緊張したけれど、すごく楽しかった。
- ・歌う人に迷惑をかけないように練習して、最後失敗したけれど弾けてよかった
- ・一人で弾いてまちがえるのとはわけが違うので責任があり、いい緊張感が持ててよかった
- ・伴奏ではパートナーに迷惑をかけて本当に悪いことをしたと思った。もっともっと練習しないとダメだったと感じた
- ・伴奏をまちがえて、相手に迷惑をかけた

- ・歌いにくい演奏をしてしまい、相手に申し訳ない
- ・ミスをすると相手に迷惑がかかってしまうことがわかった

4.2.4 「音楽表現」に係る気づき

ピアノ伴奏者の立場での「音楽表現」に係る気づきは、歌唱発表におけるそれよりも記述が多い。内容は、音量のコントロール、伴奏らしい演奏法、弾きまちがいへの対応等に関するものが主である。

- ・伴奏者は歌の引き立て役になれるのが大切だと思う
- ・歌がメインだからあまりガンガン弾かず、なめらかに弾くようにした
- ・歌いやすくするためにゆっくり弾くこと、あまり大きな音で弾かないようにした
- ・前奏は大きな音で弾いて、友達が歌い始めたら声よりも伴奏が前に出すぎないよう歌の調子に合わせて弾くように心がけた
- ・相手が歌いやすいように右手のメロディを強く弾いた
- ・相手が歌いやすいように、楽譜とは違う弾き方を工夫した
- ・歌いやすいように伴奏には変化をつけるようにした
- ・まちがえても、右手のメロディをきちんと弾けば歌ってもらえるとわかった
- ・まちがえても音楽の流れを止めないように弾き続けると、歌のペースを崩さずに楽しく歌うことができると思う
- ・ミスをごまかすことも必要だと感じた
- ・失敗してもすぐに切り替えて、次の小節を弾くことが大切だと学んだ
- ・歌い出しが入りやすいように、その部分を重点的に練習しようと思った
- ・ピアノを弾きながら周りを見ることができたらいいと思った

4.3 他者の歌唱発表に立ち会った感想・気づいたこと

4.3.1 「緊張による影響」に係る気づき

他者の歌唱発表に立ち会って感じ取る「緊張の影響」は、自分の発表の場合とは違って、受け止め方が肯定

的である。

- ・緊張して声が震えている人もいたけれど、がんばって歌っているのが伝わってきた
- ・恥ずかしがっていることが、周りからすれば恥ずかしく見えるのだと思った
- ・緊張していても大きな声で歌えるのがすごいと思った
- ・緊張していても一生懸命取り組みことが大切だとわかった

- ・笑顔で楽しそうにしている人を見ると、こちらにも楽しくなる
- ・笑顔で話をしたり、歌っている人は歌の楽しい雰囲気が伝わってきて、よかったと思う
- ・楽しんで前を向いて歌うと、聴いているほうも楽しくなる。
- ・歌詞を覚えて聴く人の顔を見ながら歌うほうがよい
- ・自分の個性を出して、自分らしく演技するのがよいと思った

4.3.2 「パートナーとのコミュニケーション」に係る気づき

記述は一例だけだが、演奏時のアイコンタクトについて記述されている。

- ・歌う人が伴奏者と時々目を合わせながら歌っているところがよかった

4.3.4 その他の気づき

他者の歌唱発表を聴きながら、練習量と発表の出来栄えを関連づけて受け止めている。

- ・しっかり練習ができている人は、歌からそれが伝わってきた
- ・2人でよく練習しているグループは、とてもうまく合っていたと思う

4.3.3 「音楽表現」に係る気づき

歌声から受け取る聴覚情報と、表情等から受け取る視覚情報について記述されている。

- ・歌詞を通して子どもに伝えたいこともたくさんあると思うので、それを伝えられるように気持ちをこめることが大切だと思った
- ・笑顔で楽しそうに歌う人、口を大きく開けて歌う人の姿を見て、歌詞がはっきり聞こえるように歌うことがポイントだと思った
- ・口の形がはっきりしていないと歌詞がはっきりとわからず、歌の雰囲気が伝わりにくく感じた。しっかり口を開いて言葉ををはきはき歌うことで表情も自然と明るくなり、気持ちよく聴かれる
- ・歌詞をまちがえても歌い続けることが大事だと思った
- ・大きい声の人は素敵だと思った
- ・声が小さくてもはっきり歌うことが大切だと感じた
- ・優しい声が良い
- ・表情の大切さを学んだ
- ・笑顔で歌うと、声も明るくなってよいと思った
- ・笑顔で顔を上げて歌う人は、聴いているほうも気持ちがいい

4.4 他者のピアノ伴奏発表に立ち会った感想・気づいたこと

4.4.1 「音楽表現」に係る気づき

歌いやすい伴奏とはどのようなものであるかを、具体的に感じ取っている。また、ピアノ伴奏に表現された個性を評価する記述が目立つ。

- ・歌いやすい人の伴奏はピアノもスムーズで、まちがえても止まらない
- ・伴奏は歌の流れをくずさないように、失敗してもそのまま弾き続けることが大切だということがわかった
- ・伴奏をまちがえても、すぐに次の小節を弾いていたのがすごいと思った
- ・その人に合わせたアレンジの仕方があることを学んだ
- ・歌の特徴に合わせて伴奏していた。自分もそういうふうに弾けたらいいと思った
- ・個人個人のレベルに合った伴奏を弾いていた
- ・ピアノのレベルに関係なく、その場に居る人が楽しく歌えるような雰囲気づくりが大切だと思った。みんな違ってみんないいと思う
- ・同じ曲でも伴奏によって雰囲気がガラッと違っておもしろかった

- ・楽しそうにピアノを弾くことが大事だと思った
- ・歌しやすい伴奏、歌にくい伴奏の違いがよくわかった
- ・安定した伴奏は歌しやすいことがわかった
- ・伴奏はゆっくりと弾いたほうが、歌いやすいと感じた
- ・歌の雰囲気に合った伴奏だと、聴いている人が曲に乗りやすい
- ・楽しさが伝わる伴奏がよいとわかった
- ・歌う人に合わせた速度で弾くことが必要だと思った
- ・周りの様子を見ながら伴奏している人がいて、すごいと思った
- ・楽譜にかじりつくのではなく、周りを見ながらニコニコと弾くのがよいと思った
- ・伴奏者の表情も大切だと感じた

4.4.2 その他の気づき

- ・3分という短い時間の中でも、聴く人の心にきくと届くことがたくさんあると思う。歌は人と人との心をつなぐ力があると思った

5. レポートの記述内容についての考察

5.1 「緊張」の影響と対処

緊張を強いられる状況に置かれたとき、普段通りの実力を発揮するための方法のひとつとしてしばしば挙げられるのは、練習を十分に積んで本番に臨むことである。人前で歌唱や演奏をおこなう状況において緊張を克服することは、たとえプロの演奏家であっても容易なことではない。しかし、入念な練習や打ち合わせといった事前の準備をおこなうことにより、緊張から生じる演奏上の失敗を未然に防ぐことは可能である。

さらに、緊張によって引き起こされる心理的变化と身体的変化を経験的に把握し、繰り返し自分自身にフィードバックしておくことは、緊張する場面で平常心を保つために有効な方法である。

歌唱とピアノ伴奏の実技発表を経験した学生たちのレポートには、緊張に伴って生じる心理的な変化（不安、焦り、後悔等）と身体的な変化（手、足、声の震え等）が記述されている。さらに、そこから引き起こされる声の不調やピアノのミスタッチといった演奏上の不都合や失敗についても、レポートの記述から具体的に把握できる。

もし、学生自身が演奏上の失敗の原因を自覚し、改善しようと努力するならば、それは有意義な失敗経験として成長への糧になる。

一方で、緊張と一口に言っても、緊張そのものが必ずしも演奏に悪影響を及ぼすわけではない。レポートの記述にもあったように、プレッシャーや役割意識がほどよい緊張をもたらし、結果的に達成感が得られる場合もある。

また、実技発表における緊張が避けられないものならば、緊張してもなお実力を発揮できるような準備を整える必要があることに学生自身が気づく仕組みが必要である。この気づきを促す手段として、実技発表後のレポート課題は有効であったと考える。

実技発表で失敗を経験した学生は、発表直後にはマイナスの感情を抱きがちである。時には、失敗を恐れる感情が次の挑戦にブレーキをかけることもある。もし、このマイナスの感情に向き合い、克服すべき課題に気づくことができれば、マイナスをプラスの成長へと転換できると考えられる。

5.2 他者の発表からの学び

人前で演じる行為においては、音楽的な要素という聴覚情報の他に、演者のふるまいや表情といった視覚情報も大きな意味をもつ。レポートには歌声やピアノの音という聴覚情報と、歌唱者や伴奏者の表情やふるまいという視覚情報の両方について記述されている。

ピアノ伴奏に関しては音楽表現についての記述が主であり、歌いやすい伴奏とはどのようなものであるかを具体的に感じ取っている様子が窺える。また、演奏技能の個人差を受容しながら、各自の技能に合わせた楽譜や編曲を加えた演奏に接するなかで、伴奏に表現された一人ひとりの個性を評価する記述が目立つ。

他者の実技発表に立ち会うことは、発表者を保育者と見立て、聴き手を子どもと見立てた状況でもある。このような場面を設定することにより、聴き手が魅力を感じる音楽表現の方法を、学生同士が学び合うことができたと推察する。

学生たちは他者の良い部分を見習い、自分の成長に役立てようとする主体的な態度で実技発表に臨んでいた。発表者を観察することを通して、自分自身が発表者となった場合を客観視できたものと考えられる。

6. 実技発表の意義

6.1 コミュニケーション能力の向上

歌唱者と伴奏者は音楽づくりにおいて緊密に影響を及ぼし合う。実技発表では学生たちが2～3人のグループをつくり、全員が歌唱と伴奏の役割を順次交代しておこなうことにより、それぞれの役割を意識して協力しながらひとつの音楽をつくり上げる経験を持つ。

音楽表現の面では速度、音量、バランス等の要素を調整するために、練習段階から言語コミュニケーションによる打ち合わせを重ね、さらに発表時においてはアイコンタクトや呼吸といった非言語コミュニケーションによって相手に意思伝達をおこなう必要がある。

他者と協力しながらおこなう実技発表は、学生たちに個人演奏では得られない気づきをもたらしたと考える。おそらく学生たちは、何のために演奏技能の向上に励む必要があるのかという問いを、自分自身に投げかけたのではないだろうか。

1人でおこなうピアノ演奏であれば、ある程度の練習量で妥協していたかもしれないところを、パートナーの伴奏をするにあたり、相手のことを思っていっそう練習に励むという姿勢を示した学生が少なからずいる。このように他者を利するために最善を尽くそうとする行為は、社会的行動と呼べるものである。

学生たちのほとんどは、卒業後には保育専門職となってチームで仕事に取り組むことになる。相手のために努力する姿勢は、必ず将来に生かされるものと推察する。

6.2 「音楽表現」に係る気づき

歌唱時における気づきよりも、ピアノ伴奏者の立場での気づきに関する記述が圧倒的に多く、その大半がパートナーとの音楽づくりに関する内容である。これは、伴奏者として黒子的な立場にある時のほうが、相手のために演奏するという気持ちになりやすいためと考えられる。

ピアノ独奏であればあまり気にならないような音量や速度の設定、ミスタッチなどが、パートナーのために伴奏する状況では、それらに対してより厳しくならなければならないという自覚が生まれる。このように主体的な自覚をもって練習に励むことは、確実に演奏技能の向上につながるものと推察される。

音楽をつくり上げる喜びを他の誰かと分かち合う経験は、さらに身を入れて練習に励もうという動機になっていると考えられる。

6.3 実技発表の意義のまとめ

保育専門職に求められる「演じる技能」と「精神的な強さ」を獲得するために、人前に立って演じる実技発表は有効な学びの方法である。このような経験を重ねることは、演じる技能としても、また精神的な側面においても大きな力となって、「本番力」の強化につながるものと考えられる。

歌唱者として、またピアノ伴奏者としての役割を自覚しながらパートナーとともに音楽づくりをおこなったこの経験が、学生たちのこれからの社会生活に役立つことを期待している。

7. 参考文献

- 谷村宏子 (2012) 音楽療法の視点に立った保育支援の試み 兵庫：関西学院大学出版会
 松井紀和 (1991) 小集団体験 東京：牧野出版
 朝野典子 (2011) 保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [Ⅱ] —「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」の有効性— 夙川学院短期大学教育実践研究紀要第4号

ピアスーパバイザーからのコメント

歌唱・ピアノ伴奏の実技発表後に書かせた学生のレポートを整理し、考察した報告である。レポートを書くことが、準備段階や他者の伴奏時に必要な練習や気配りなどを自覚するのに有効であることを指摘し、その「気づき」が、保育者として必要な社会性の涵養に繋がるとする。また、実技発表は、保育専門職に必要な「演じる技能」と「精神的な強さ」の育成に役立つと、実践の効用を伝えるので、今後の授業でも、実践と「気づき」が促されることが期待される。

(担当：児童教育学科 三木 麻子)